

# 分科会「ろう女性の歴史」第一部・ミニ講演

助言者：大矢 暹／司会：美多哲夫／記録：美多哲夫

まず配布しています資料についてお話しします。昭和23年の「日本聾唖新聞」のコピーです。藤本敏文連盟長が3回にもわたって「ろうあ婦人について」私見を述べています。戦争が終わった。日本は若い男性が少ない。それで女性は結婚が難儀している。ろうあ者も結婚がなかなかできないということではおなじ問題を抱えている。ろうの男性は戦争にとられていないのにろうあ女性の結婚がなかなかできない。こんなことが書かれています。



助言者 大矢氏

藤本の問題提起は「ろうあ婦人の幸せとは何か」

と言うこと。一回・二回・三回とたくさん書いていますが、結論は、『女性は結婚したほうがいい、子どもを産んで母になるのがいい。けれども、今の世の中、ろうあ男子の雇用も厳しく、その賃金では食っていけないからおいそれとろうあ女性が結婚に踏み切るのはかんたんでない。そうなれば、ろうあ婦人部をつくって、ろうあ婦人どうしが助け合って暮らしていくこと、そこに幸せを見つけていく、これが今のところいちばんいい』と結んでいます。

昭和23年、今から56年前のことです。藤本は戦前戦後を通じて、長期間、日本のろうあ者団体のトップでした。彼も含めて、リーダー・会員の思想や行動を、日本聾唖新聞や機関誌「ろうあ界」などの歴史資料から掘り起こすことも、この分科会の役割かと考えて、本日は日本聾唖新聞の藤本私見を持参しました。今日はこのろうあ連盟の発行した新聞の記事などをベースに話したいと思います。

さて、私は長年、京都で育てていただきました。なかでも、京都のいこいの村に特別養護老人ホームをつくる運動の過程で、お年寄り、女性のお年寄りといいますが、おばあさん方にはたくさんのお話を教えていただきました。今でも私の胸の中に刻まれています。

鳥居さんというおばあさんが私に説いて聞かせたことですが、「いまのあんたのような若い者は、女も男もみんな幸せ。昔は大変だった」鳥居さんは左手の手のひらで指文字の「み」の様に、人差し指・中指・薬指の3本を私の目の前に持って来られました。次に、右手の指先で左手の中指をつまみ、「私は中指止まりだ」と言われたのです。謎解きをしますと、「女性には3段階がある。わしは旦那がいるが、子どもを産み育てられなかったから二段止まり。ちなみに、そこにいらっしゃる藤田孝子さんは、いちばん上の指、つまり最高の段です。母としても生きていらっしゃったから。もうおわかりですね。

昔、先輩は、女性の一生を「娘」「女」「母」に区分して、手話でそれぞれの区分表現がされていたと言うことです。

鳥居おばあさんは「私は結婚できたから娘⇒女になれた。でもその次の母にはなれなかった。女どまり。」と言われました。「子どもを産むこと一切ならん」と親に言われて、ついに母になれなかったという意味です。女性の最高の幸せとは、母になって子どもを抱くこと、乳を吸わせること、その行為の中に、いちばん女の幸せを実感するのだと、藤本は書いているのですから、会員も女性の幸せを「むすめ・おんな・はは」の三段階で区分したのでしょうか。会場のみなさまはどのように思われますか。若い女性のみなさんはどうですか。

昔のろう女性はなかなか「母」になることができなかったといえます。いこいの村の老人ホー

ムに入居されたおばあさんの多くは「母」になれなかったです。あるおばあさんの話です。結婚したい人がいたけれども、お兄さんにガミガミいわれて、二人で逃げたそうですが、その晩のうちに連れ戻されて、仲を引き裂かれたと話されました。

今はライフサイクルあるいはライフステージなど、価値観の多様さというか個性の多様化というか、藤本敏文の生きた時代、鳥居さんたちを縛った時代と大きく相を変え、3つ区分のそれぞれの価値優劣をつけることを必要としなくなっています。会場の若い人はどうですか。結婚はしない、独身のまま、シングルライフで十分幸せにやっていると考える人、実行するかたもいます。結婚したくないが我が子はほしい。抱いて育てたいとの考もあるようです。いろいろありますが、それらを歴史的の流れの中で捉え、深めていくことか肝要かと思います。

藤本は、ろうあ婦人がなかなか結婚できない主たる理由はろうあ男性の経済力の低さに求めています。なぜ低かったか、本質的な理由があるのですがそれには触れていません。ともかく結婚したくても貧乏で食えない、頼りにできない。で、男性は結婚できなくても我慢ができる。性的な欲求も何とかなる、という風に藤本は述べています。

ところが女性は何とかなるわけでないから、人間の本能についてです。苦しんでいる実態があると。解決する方法は結婚だが、ろうあ男性が貧乏でそれがなかなか難しい。

結局どうすればいいのかというと、女性も働く、男性が貧乏でもいい、結婚して苦労して共働きする、その間は子どもを作らないで我慢する。お金をためて家計がよくなってきたときに、女性が仕事をやめて、子どもを産むのがひとつの選択肢と提案しています。

しかし、藤本は、結婚したらおそらくすぐに子どもが産まれるだろうから、と藤本は頭を抱え、もうひとつの選択肢として、聞こえる人は給料が高いから、その「常人」と結婚する。「常人・常夫」と昔は表現していたようです。また「常婦」もあります。

「常人+聾婦」の組あわせという結婚も選択肢だが、やはり、それには、聾婦の側に持参金があるとか、出自がいいとか、一定の有利な条件がなければ無理だと、そんな聾婦がどれだけいるか、いないじゃないかという、そんなニュアンスも感じます。ただ、原稿を書いてから推敲の中で考えを深めたのでしょうか、自分は男だから、ろうあ婦人に男の自分が「頑張っていきなさい」というのは、適当でないので、婦人の問題は婦人自身が考えていく、そのために婦人どうしが集まって相談して、自分たちで解決していきなさい、男はそれを助けねばならないという風にもってきています。皆さんいかがでしょうか。

次のエピソードです。せっかくの子供を自ら育てることのできなかったろうのおばあさんが50数年の歳月を越えて、生き別れになった我が子と再会を果たされたというお話です。昔も今もまだまだですが、私たちろうあ者が子どもを産み育てていくことについて、まだまだ意識の問題や社会的公的な支援の課題が残っていると思います。

ひと昔前、私たちを縛っていた意識は、「ろうの子どもが産まれたらマイナス、聞こえる子どもが産まれたらプラス」という考え方でした。戦前のドイツではゲルマン民族の種の優秀性(?)を守るという「断種法」が狂気のように暴れまわりました。亡くなった中西喜久司さんが本に書いていますので、読んでほしいと思いますけれども、「ろう」を劣性遺伝として「ろう者どうしで結婚したら、ろうが産まれる」ということは、戦前からろうあ者を苦しめました。聾学校の関係者の研究レポートなどがかなり残っています。

そんな中で、ろう者どうしが結婚して、ろうの子どもが産まれると、「下手くそな嫁選びをしたから」と仲間を攻撃することまであったと言います。例えばの話ですが、会場にいらっしゃる藤田孝子さんの場合でしたら、聾学校の教師になられたろう者の藤田威さんにご結婚され、2人の子どもさんを得られました、聞こえる子供さんでしたから「うまい、上手、見事」とほめられるといった、あくまでたとえ話ですが、そういうことです。ろう者どうしが非難しあうという団

体内部に混乱と不和の種を撒き散らす働きをしたのです。

長年、京都ろうあ協会の会長をされた小山さん。非常に立派な私たちの先輩です。結婚されて産まれた娘さんはろうでした。それをみんなから「子作りは下手」と陰口するろうあ者もいて「悔しかった」と話しておられました。しかし、ろうの赤ちゃんはダメ、聞こえるからいいという、そんなことは誰も決められるはずがありません。でも、昔は遺伝の問題で、ろう者どうしがお互いに傷つけ合っていました。

京都市の南部に長岡京市があります。戦前の話です。長岡の村の村長さんに娘さんがいました。ろうの娘さんです。名前は樋口和歌栄さん。三好さんをご存じの方も大勢いらっしゃると思います。すでに他界されていますがご生前の私も大変お世話になり教え導いて下さった方でした。

若いときは大分県の土屋元連盟長、ヒゲの連盟長です。そちらにしばらくお世話になったとも聞いています。ともかく波乱万丈の人生。京都のろう学校に学び、テニスをされている写真も残されています。当時は大阪・東京くらいで三重やここ広島にはまだまだろう学校がまだできていないときでした。京都の聾学校には、遠いところからも、愛する我が子に教育をと、こどもたちが学びに来ました。三重県の醬油屋さんでしたか商家の息子山が聞こえなかった。そして京都のろう学校で勉強されたのです。ろうの先生もおられました。中垣内先生とか、三嶋先生とかです。

先生たちは、当時の「日本ろうあ協会」の幹部として、また傘下組織としての都道府県支部である「京都部会」のリーダーとして活躍されていました。卒業生の結婚のお世話も大事な役目のひとつだったそうです。樋口和歌栄さんも、そうして結婚されたのです。相手は先ほど紹介した三重県の商家の息子さん。二人は、京都府立大学の近く、下鴨というところに家を借りて生活を始めます。多分みんながうらやむ幸せな生活のスタートだったかもしれません。やがて、二人に赤ちゃんが生まれます。それはかわいい女の子でした。人物関係の話がややこしくなりますからモデルをお願いします。

三重県の男性役、その母親役、樋口さん、その母、赤ちゃん、仲人の中垣内先生役、それぞれご協力ください。

役の方ご苦労様です。さて、和歌栄さんは気がのらなかったとこぼしていましたが「いい人だ、幸せになる」と、中垣内先生に説得されて結婚に踏み切ります。そして赤ちゃんが産まれました。モデルをお願いします。ご主人の母親のモデルもお願いします。聞こえる母親です。手話だけだとややこしく、モデルがいると話が伝わり易いです。

ある日、和歌栄さんが、いつものように実家の母親の手助けで、行きつけの銭湯へ赤ちゃんのお風呂。先に赤ちゃんを洗い、脱衣場で待っている母親に赤ちゃんを預けた。しばらくして和歌栄さんがあがって我が家に帰ると、母親が一人居るだけで、預けた赤ちゃんもご主人の姿もない。母親に問いつめると、ご主人と実家に行ったという。さらに問い詰めたところ「聾啞二人で子育てむり、我慢なさい」と、一緒に泣いてくれた。しばらくは泣きながら暮らした。ご主人は戻ってこず、和歌栄さんが後々に知ったことは、離縁の手続きもすべて事前に和歌栄さんのご両親は承諾させられていたようです。

その後、和歌栄おばあさんは、ろうあ者の保護事業に熱心な事業者の息子さんと再婚され、その方が、日本ろうあ協会京都部会部会長に就任されるなど、充実した一時期を過ごされるのです。画、そのあたりは飛ばしまして、話を、今から20年ほど前に持ってきます。

和歌栄さんも80歳ぐらいになられたかと思います。日頃は「京都ろうあセンター」のまかないをかつて出てください、私も職員でしたからたいそうお世話になっていました。中国・満州の残留孤児の肉親探しがテレビで話題になっていた頃です。和歌栄おばあさんは言います。

「テレビで見た。肉親に再会した孤児が抱きあっている。私も娘を抱きしめたい。」  
和歌栄さんが、毎週通っている、地域の手話サークル・みみずく会上京支部の浅井さんに打ち明

けたのです。浅井さんは最初なんの事か分からなかった。テレビの感想を話してくださっているのかと。抱きしめたい子供さんがいるとは全く聞いたことがなかったから。

でも、いつものひょうきんな表情が消えているおばあさんの話に、ただ事ではないと感じて、詳しくたずねたのです。それから、おばあさんの「私の娘を探してほしい」「会いたい」との気持ちに寄り添った動きが始まりました。京都市聴覚障害者センターが長岡京市を通じて三重県に照会、娘さんにつながったのです。電話に娘さんが出ました。恵美子さんというお名前です。歳は54歳ぐらいでした。

恵美子さん話では「母が生きていて、私に会いたがついていると市役所から電話があったときの気持ち、言葉でいえません。『京都の母親は亡くなっている』と何度も何度も祖母から聞かされていました。戦争もあり戦後の厳しさもありましたし。京都の長岡京へ行き、尋ねたところ、家人からも「死んだ」と聞かされ、母の写真を、一枚いただいて仏壇おそなえし、冥福を祈ってきたのです。50歳をこえた私のそんな日々の、突然、京都からの電話でした。「お母さんが会いたいと言っていますが、あなたも会いたいですか」と。わたしは「会いたい」と答えました。

一方、和歌栄おばあさんです。電話のやりとりをおばあさんに伝えたと、おばあさんは「子どもを捨てた同然の私をうらんでいる。あいたくない。あいたい、断ってほしい…」激しく揺れ動く気持ち、涙がいっぱいでした。そうでしょうね。私もそうでした。

あの日は、たまたま11月3日、文化の日、そいですね。戦後の日本の新しいを建設していこうという平和・人権・国民権の憲法が公布された日でした。京都のホテルの一室にどきどきして待っておられた和歌栄さん、私も手話通訳者もそばにいて緊張していました。そんな時が流れて、ひとりのご婦人が静かにドアを開けて入っていらっしやったのです。私と通訳者は会釈してしばらく外で待たせていただきました。小1時間ぐらい、お二人は手のひらに字を書きあったり、また筆談でお話されたのでしょうか。

その日から、月に一回のお二人の時間が作られたようです。しかし、その時間は長くはなく、和歌栄おばあさんはガンで亡くなります。おばあさんの人生を、それが示している教えをしっかりと胸に刻むため、小冊子を作りました。おばあさんを偲ぶ人がおおぜいいましたし、恵美子さんにも母との心のかよいあいを書き寄せていただきました。

いろいろな女性の歴史があります。ひとりひとりの歴史があります。大事なことです。本・ビデオに記録して残しておかないと、なくなってしまいます。若い私たちは歴史を学ぶだけでは半分です。歴史を伝える役割もあります。歴史は繰り返される可能性があります。戦争の歴史がそうです。それをおし止めるためには、事実を掘り起こし、真実を解明し、文字や映像で伝えていく努力をしなければならないと思います。

最後に、持参しました古い新聞に、たまたま「ミスろうあ」の写真と記事が載っています。そしてこれも偶然でしょうか、今日、この分科会に参加された中のお二人は、ミスろうあの写真に載っている方と先ほど伺いました。びっくりしています。アメリカのミスコンにろうあ者が選ばれたのは少し前です。日本の私たちとして、「ミスろうあ」のコンテストを今野時代にどう評価するか、オープンな論議もされるかと思いますが、広い視点からの論議を期待します。

ひとりひとりのおじいさん、おばあさんからきちんと聞いて学ぶ、それをきちんと記録に残していく作業、これはまずい、これはむずかしいという事実もあるかと思いますが。人権への配慮、個人の尊厳をきちんとし、女性の方々の人生を記録して行く活動を提起してミニ講演を終わります。記録に残して後世に伝えていけるように、皆さんで話し合うことをお願いしたいと思っています。(おばあさんのモデルに) どうもありがとう。おばあさんが天国で見ていると思います(笑)。

尚、前年大阪集会で配布できなかった『ろうあ保護院』関連の資料を持参しましたので参考にしてください。